庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」

――主体性のサバイバル――

遠藤伸治

一

庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」は、昭和四十四年上半期の芥川賞を、田久保英夫の「深い河」とともに受賞した作品であるが、三島由紀夫、丹羽文雄、石川達三、瀧井孝作、川端康成、舟橋聖一、大岡昇平、井上靖、中村光夫、永井龍男、石川淳、による選評をみると、この作品に対する評価は、次の二点に関して、ほぼ一致しているように思われる。

第一点は、この作品の巧さ、この作者の才能に対する評価である。「才気あふれる作品」「甚だ巧い」といった三島由紀夫の積極的な評価をはじめとして、舟橋聖一の「高校生らしい純情と不純が巧みにないまぜられている」といった評価があり、「作品全体から感じられる新鮮な感覚の中に、時折、汚れというか分別臭いというか、そうしたものが顔を出している」ことに「不安」を感じるため、「なかなか決心がつかなかった」と保留付きの評価を下している井上靖も、結局は「『赤頭巾ちゃん』の才能」をとると述べ、作品全体としては否定的に評価している中村光夫や永井龍男にも、「才筆には違いありませんが」「まことに気がきき才筆なことは確かだが」という形で、この作品の巧さは認められているようである。

第二点は、この作品の面白さについてである。最も肯定的な評価としては、丹羽文雄の「面白い小説のジャンルでは群を抜いていた」という評が、また、瀧井孝作の「何か魅惑される、たぶらかされる面白みがあった」という評があり、石川淳は、この作品の「おもしろくなくても、おもしろいように見える」ところが「おもしろくないこともない」といった言い方をし、「読みあぐねた」という最も否定的な評価を下している川端康成も、一応、「おもしろいところはあるが」とことわっている。

作品の巧さと面白さという点ではほぼ認められているといってもよい、この作品に対する評価がわかれているのは、この作品の持つ強い現在性に関してであり、それを一人の高校生の口を借りて饒舌に語っている作者の姿勢に関してである。この点に関しては、大岡昇平の「現代の典型の一つを、『猛烈』『最高』など流行語で書き表しているのに興味を惹かれました」という肯定的な評価から、石川達三の「作家はこういう形をとらなくては現代の複雑な生活の相

を捕え得ないのであろうか」という疑問、そして、川端康成の「むだな、つまらぬおしゃべりがくどくどと書いてあって、私は読みあぐねた」という否定までの幅がある。

つまり、この作品の評価上の問題点となっているのは、現代に対する作者の主体的な立場であって、永井龍男の「アイスクリームのように溶けて了う部分の多いことも、この作品の特徴であろう」といった否定的な評価は、現代の生活、風俗を一人の高校生の主人公に饒舌に語らせる作者の意図がはっきりせず、単に現代風俗をおもしろおかしく巧みに描写するだけに終わってはいないか、という疑いに基づいているように思われる。

しかし、後に、作者自身がエッセイ「狼なんかこわくない」の中で語っているところによれば、「赤頭巾ちゃん気をつけて」は、昭和四十四年の時点での現在に取材し、それをスクープしようといった動機で書かれたものではなく、60年代から70年代への時代の進展に対する強い問題意識によって書かれた作品なのである。

すでによく知られていることだが、この作者には、昭和三十三年、福田章二という本名で発表した作品「喪失」によって中央公論新人賞を受賞し、その翌年に作品集『喪失』を刊行してから「赤頭巾ちゃん気をつけて」を発表するまでに十年間の沈黙があり、その間の事情を作者は次のように説明している。

何故ならぼくは、小説、というより芸術を、いま言った「うめ合せ」の一つの有力な方法、つまりぼくの「力」を社会に還元するための方法の重要な一つとして考えていたのだ。ところが『喪失』という小説は、よりによって、この「うめ合せ」の方法も分らぬまま競争関係の中で傷つけ合う「若さ」をとらえ、その不毛と残酷さを完全に抽出しながら、要するに問題の提示と分析だけに終っているではないか。

（略）

つまり、さきに述べたように、ぼくは、小説を書くということをぼくの「力」を社会に還元するための方法、つまりは一つの行動として考えていたわけだが、『喪失』を書きあげた結果、ぼくの小説の「プラス」の効果に疑問を抱き、小説を書くということも含めてぼくがぼくの「力」をどう育てどう使うかという点において、全般的な「判断中止」と「行動力喪失」の状態に陥らざるを得なかったわけだ。

すなわち、この作者にとって、小説を書くことは、社会に対する行為であり、それも、社会に対して「プラス」の効果を持つ行為でなければならないのである。そして、それにもかかわらず、昭和三十三年に書かれた「喪失」が、「競争関係の中で傷つけ合う『若さ』をとらえ、その不毛と残酷さ」を分析し、提示するだけに終わってしまったために、作者自身、小説を書くことも含めた社会参加の道を封じてしまったのである。

続いて、作者は、そうした状態を脱し、「赤頭巾ちゃん気をつけて」で再び小説を書いた事情について、次のように述べている。

67年に始まる大学紛争が激化していくにつれ、ぼくは、ぼくの中の、なによりも無力な自分自身に対する苛立ちが、次第次第に耐えがたいまでにたかまるのを感じていたのだった。（略）

もちろんそこには、当時者のそれぞれにとってかけがえない価値を持つ「譲れぬ一線」としての政治的或いは思想的な理由があるにはちがいなかった。しかし、ぼくにとって非常に重大

に思われたのは、そのような政治的思想的な対立抗争が、混乱と動揺の中では、常にその排他的側面ばかり強調され、いわば境界における党派的戦闘ばかりが激化するような形になるという事実だった。そして、境界における党派的戦闘が激化する時、そこでは、ちょうど青春のさなかの「競争」と同様、なによりも「勝敗」が重要視され、したがって、なによりもまず目前の戦闘に有利な技術ばかりが競われることになる。（略）

ぼくが、その準備不足を感じながら、でもとにかく再び小説を書き出した大きな動機は、かくして、ほかならぬこのような時代状況を砂かぶりで見ながら、しかし結局は十年間何もできずに手をつかねてきたぼく自身の苛立ちに基く一種の短絡反応にあったと言えるかも知れないのだ。

つまり、昭和三十三年、「喪失」によって、現代の競争社会における「若さ」の不幸を描いて以来、現代の社会状況に積極的に参加する「若さ」をポジティブに表現することが、この作者にとって、十年間にもおよぶ課題だったわけであり、「赤頭巾ちゃん気をつけて」は、そうした意識に基づいて書かれた作品であったのである。この問題意識の持続性は注目にあたいするといえるだろう。しかも、作者は、十年の間に「若さ」を生かしやすいように社会状況が変化したという理由で「赤頭巾ちゃん気をつけて」を発表したのではなく、逆に、「喪失」で描いたような残酷で不毛な競争がさらに進行しているという状況判断を下しながら、あえて、ポジティブなヴィジョンを提出することに踏み切ったと述べているのである。

このような意味で、「作者がここで懸命に生かそうとしている（あるいは装おうとしている）アクチュアルな若さが遂に生動してこないから」この作品に「最後まで興味を覚えることができませんでした」という、芥川賞の選評における、中村光夫の言葉は興味深い。

特殊な、非日常的な設定、あるいは、社会状況とは直接かかわらない個人的状況設定なしに、すなわち、現代の日本の社会状況、風俗、日常生活そのものの中で描かれた「アクチュアルな若さ」が「生動してこない」ということは、中村光夫のそっけない言い方からもうかがえるように、時代の進展に沿った当然の判断といってよいのかもしれない。日本の富裕な大衆化社会、情報化社会のなかで「アクチュアルな若さ」を維持することの困難は、すでに60年代の初めから明瞭になっているような印象が、確かにあるように思われる。しかし、それにもかかわらず、というよりも、逆に、それだからこそ、そうしたことをすでに「喪失」によって充分認識していたこの作者が、あえて70年代を前にして、現代の日常的通俗さそのものの中に「アクチュアルな若さ」を生かそうとしたということは、興味がもてないどころか、きわめて興味深いことに思われるのである。

二

続いて、こうした作者の意図が、どのように、「赤頭巾ちゃん気をつけて」という作品に実現されているのか、ということをみていきたい。

先にも述べたように、この小説は、主人公の一人称で統一されており、この主人公が、ある日の自分の行為と思いとを語る、というよりも、学園紛争を中心とした社会状況に対する自分の思いを主に語る、という形式になっている。

主人公は、東大に進学するつもりであった日比谷高校の三年生であるが、学園紛争による東大入試中止という事態に直面し、そこで、大学進学をやめ、大学という制度の外で自分の知性を育てていこうと決心する。そして、そのことを、幼なじみの女友達に知らせようとして電話をするが、うまく伝えることができない。そこで、直接会って伝えようとするが、それもうまくいかず、ちょうど生爪をはがしていた足の指が痛くなり、その治療に行った病院で美人の女医さんに誘惑されるが、逃げる。病院からの帰り、近所の奥さんに出会うが、奥さんの話を一方的に聞かされたあげく、主人公の言うことは理解されない。家に帰り着いた主人公のところへ、小説家志望の友達が訪ねてくるが、彼も、小説を断念せざるをえないという現代の社会状況に対する悩みを、一方的に話して帰っていく。そして主人公は、その悩みをかかえこんだまま、銀座の人ごみの中を歩きまわり、爪をはがしている指を一人の幼女に踏まれ、その子に「赤頭巾ちゃん」の童話の本を選んでやることによって、悩みから逃れ、最後に、幼なじみの女友達に会って、大学進学をやめるという自分の決心を伝える。

以上が、この作品のあらすじである。主人公は、作品の最初で、自分の決心を女友達に伝えようとし、作品の最後で、それを果たす。つまり、この作品全体を通じて、主人公が行っている行為は、状況に対する自分の決断を伝えようとすることである。そして、それが果たされるまでの間に、それを容易に果たさせない障害の数々が描かれているのである。

このように、あらすじをたどれば、この作品の基本構造が、「喪失」を書いて以来の作者自身の姿に、かなり直接的な形で対応しているということがいえるように思われる。友達に決断を伝えようとする主人公の行為は、そのまま、読者に自分の思いを伝えようという、作者の書く行為そのものに対応し、主人公をさえぎる障害は、「喪失」以後の作者を「行動力喪失」に陥らせた社会状況を象徴し、銀座で小さな女の子と出会う場面は、「赤頭巾ちゃん気をつけて」によって十年間の沈黙を破った作者の心情を表現しているのである。

いくつかの場面について、もう少し具体的にみていくと、例えば、作品の最初で、幼なじみの女友達に自分の決断を伝えようとした主人公は、それを言うより先に、相手から「エンペドクレスのサンダルの話知ってる？」と快活な声で聞かれて、次のような状況に陥る。

「その、なんだな、エンペドクレスってのは、例のイオニア派のあれだな。」

「イオニア派？」と、とたんに彼女の声が険しくなった。無理もないけれど。

「うん、ほら、万物は火と風と水と土からできていて、愛と憎しみの力でくっついたり離れたりするって言ったやつだ。火と風と水と土とがだよ。」

ぼくはできるだけ陽気に言ったのだが彼女はもう氷のように冷たくなってしまった。もういけない。

「へえ、あなたよく知ってるわね。」

「だって受験生だからね。まあ、八百屋がキャベツ売るようなものだ。」

「ほんとによく知ってるわ。」

「つまらないことをいっぱい、ね。」

「あたしをからかってんの？」

「ちがうよ。しまった、と思ってんだ、分るだろ?」

こうして、結局、気まずくなって、主人公は自分の決断を伝えることができず、電話は切られるのであるが、ここで、主人公の行為をさまたげたのは、未知の知識を獲得したり、新しい情報を交換したりすることの純粋なおもしろさよりも先に、とりあえず聞かれたことに対して解答しようとする自分自身であり、そして、そうした受験生らしい自分をつくりあげている競争社会であるといってよいであろう。大学進学をやめ、受験競争から脱け出し、自分自身の力で自分を育てていこうという決断を伝えようとしているにもかかわらず、眼前の問題に即座に解答しようとしている、いかにも受験生らしい自分自身の姿に気づいたとき、主人公の思いは内に閉ざされるのである。

主人公が銀座の街角で小さな女の子に出会うまでに描かれているのは、こうした、状況への通路を閉ざされて、主人公の心の内に蓄積された苛立ちである。主人公は、受験競争に代表されるような、情報獲得競争が行われている社会のさまざまな状況にぶつかりながら、いつのまにか競争の中にまきこまれてしまっている自分に対して否定的な自意識を持つと同時に、自己の内に閉じこもり、競争を傍観しているだけの自分自身に対しても不満をつのらせていくのである。

そして、こうしたにがにがしい否定的な自意識の中に閉じ込められ、その閉ざされた自意識にたてこもって、周囲のすべてを否定しつくそうとする絶望的な状態に陥ったとき、主人公は、一人の女の子との出会いをきっかけにして、周囲の状況とかかわっていこうとする主体性をとりもどすのである。

そしてぼくは（詳しく話したらきりがないのでやめるけれど）、このちっちゃな道草好きのやさしい女の子に、素敵な赤頭巾ちゃんのお話を選んでやりたかった。見知らぬ狼さんを見てもニコニコしてこんにちはなんて言ったり、森の中に咲いているきれいなお花を見てついおばあさんのために摘んでってあげようと道草したり、そして狼に食べられてもあとでおなかからニコニコして出てくる可愛い素直な赤頭巾ちゃんを。

（略）

ぼくはさまざまの思いを、いまにも溢れそうな涙を必死になって目ばたき一つしないでこらえながら、ちょうどいまにもこぼれそうな大事な金魚鉢でも抱えているみたいに、ざわめく街角のまん中で、静かにひっそりと、でも誰よりもしあわせに喜びに溢れて、いつまでもいつまでも立ちつくしていた。

じつに、ささやかで幼い善意であり、ナイーブでロマンチックな抒情ではあるが、これが、単なる甘さと感じられず、鮮烈なカタルシスをともなう感動をよぶのは、ここにいたるまでに語られてきた、現実と否定的で閉ざされた自意識との重さゆえである。競争を必要悪として容認して生きるか、そうでなければ、競争を避けて自己の内に閉じこもるか、いずれにしても、主体的判断も行為も維持できないと思わせるほどに、あらゆる局面に浸透している現代社会の情報獲得競争をみせつけられた後で、こうした最も素朴で原則的な形で外界への小さな通路が開かれるのをみて、洗われたような、さわやかな印象が生まれるのである。そして、「誰よりもしあわせに喜びに溢れて、いつまでもいつまでも立ちつくしていた。」という主人公の幸福な思いを、おそらくは作者自身とともに、読者も共感する

ことができるのである。

こうした感動の延長上に、主人公は、自分の主体的な決断を女友達に伝え、作品は幕を閉じるのであり、結局、主人公の、そして、作者の姿勢は、自己を守るだけで手いっぱいになりそうな圧倒的な社会状況の中で、なんとかして、自分の決断を、生き方を、相手に伝えようとすること、判断と行為の主体性を維持しようとすることであるということができるであろう。この作品は、その大部分が、一般にいわれているように、モノローグではあるが、最後にコミュニケイションの成立が描かれているのであり、この作品が、発表後、多くの若い読者の反響をよんだのは、困難な状況を直視しつつ、あえて読者にメッセージを伝えようとする、作品の基本構造、作者の基本姿勢によるものだと思われるのである。

しかし、こうした、競争社会の現実とナイーブな夢とを、作者は、単純に自然な形で重ね合わせようとしているわけではないし、別の言い方をすれば、「喪失」から「赤頭巾ちゃん気をつけて」までの十年間の心情を自然な形で再現しようなどとしているのではない。果たすべき一つの目的を持った主人公が、さまざまな障害に遭遇しながら、最後に、その使命を果たし終わるという、この作品の基本構造は、物語の最も基本的で一般的な形態であるといってもよいように思われるし、また、主人公の遭遇する事件の数々も、白衣の下に何も着けていない美人の女医さんに誘惑されたり、いかにも「PTA」的な奥さんに路上でつかまったり、現代の赤頭巾ちゃんと呼べそうなかわいい女の子に「赤頭巾ちゃん」の童話の本を選んでやったりするといったもので、きわめて通俗的な虚構である。つまり、こうした、一見、軽薄な、浮わついた見かけを通すことによって、きびしい現実の中にナイーブな夢を定着させ、十年間の重い想念を伝えようというのが、この作品において作者がとっている方法なのである。

この方法は、もう少し細かくみると、二つの機能を果たしているように思われる。一つは、進行していく情報化社会の重さから自己の主体性を守る機能であり、もう一つは、もっと積極的なものである。

例えば、主体的な判断を欠いたままに、とりあえず相手を否定し、相手との差異をきわだたせることばかりに熱中するという、不毛で馬鹿ばかしい競争に疲れ、こうした競争のみが激化していく「時代の流れ」をまえにして、小説を書くことを断念すると言う友人（ちょうど、「喪失」を書いた後、沈黙に陥った作者自身に相当する登場人物）に対し、主人公（「赤頭巾ちゃん気をつけて」を書いている作者に相当する）は、次のような言葉で励ますのである。

「おれはすごくテレビが好きでね、しょっ中見ているんだ。おまえに言わせりゃ、ありゃみんなとんだ阿波踊りだよ。でもとにかく面白いんだ。特にコマーシャルなんてのはすごいんだ。それに面白いだけじゃない。ためにもなるんだよ。薬のコマーシャルがあってね、強精剤でね、王竜ドリンクってやつだ。三浦布美子っていうものすごくきれいな女の子が出てきてね、素敵な日本髪でこう着物の袖をとって首をかしげてさ、そいですごく色っぽく言うんだ……。」

「疲れたあなたって、」と彼が、かすれたような声で割りこんできた。「キライ、か？」

「ちがうよ、いやって言うんだ。」

ここで主人公は、情報化社会における競争を代表するような現象の一つである、テレビのコマーシャルについて話しながら、わざと、そうした背後の現実にふれないで、最も表層の、明るくナンセンスな面白さについてだけ語っている。競争社会の重圧とまともに対決し、現実との間の通路を閉ざしてしまうことを避けるために、現実の重さを受けとめつつ、その表層の明るく通俗的な面白さを楽しむことで、結果的に、現実とかかわっていく主体性を維持する、これが、ここで主人公がとっている軽薄な態度の意味である。

こうしたことが、恋愛においてすら主体的判断を欠きつつあるといったことを美人の女医さんに誘惑されそうになる話としておもしろおかしく語ることをはじめとして、「赤頭巾ちゃん気をつけて」という作品全体における語りの方法の一つの意味である。これは、その軽薄で浮わついた見かけとは逆に、こうした方法をとらなければ主体性を維持できないという、時代状況とそれに対する自己の能力の限界とについての、充分で冷静な認識にもとづいているということができるであろう。

しかし、現実の重さをかわしているというだけでは、現実に対して積極的にかかわっていくということにはならないのであり、そのため、いくらか元気をとりもどした友人が帰っていった後で、主人公は、かえって重苦しい気持ちをかかえて銀座の街を歩きまわることになるのである。そして、そこで、例の女の子と出会い、もう少し積極的な意味を見出すのである。

そうしてぼくと彼女は、街路灯と枯れた街路樹の間にまるで商売をほっぽり出した靴みがきのコンビみたいなかっこうでしゃがみこんだまま、何時間も（とぼくは思った）エジプトの話を続けた。ぼくは持てる知識を総動員して（受験勉強だって案外役に立つんだ）、クフ王やらトトメス三世やらネフェルトイチやらクレオパトラやらをいちどきに登場させ、さらにファルーク王やらロンメル将軍やら、そしてその上アラビアンナイトまでまぎれこませてなんとも珍妙かつ絢爛にして豪華（？）なる大冒険・大活劇をくりひろげたが、まあこれだけ役者がそろえばどんな話だって面白くなるにちがいない。（略）そして彼女はもうすっかり興奮して夢中になってしまい、千円札とハンンカチーフを両手でしっかりつかんでひっぱったりゆるめたり、ヤマ場に来るとハアハアと肩で息をしたりして聞いていた（ぼくは童話作家になれば一家をなせるんじゃないかと思ったものだ）。

この部分は、この後、先に引用した、主人公がこの女の子に童話の本を選んでやり、悩みから脱して、喜びとしあわせに溢れて立ちつくす場面へと続いていくのであるが、それは、受験勉強に代表される競争を通じて獲得してきた知識が、自分以外の人間（たとえそれが幼い子供一人でしかなくても）を幸福にするのに役立つということを確認できたからである。主人公は、ここで初めて、機知に富んだ面白い物語をつくることが、自分の主体的エネルギーをポジティブに生かす具体的な方法となりうることを感じとったのである。

先に引用したエッセイの中で、作者は、「赤頭巾ちゃん気をつけて」の最終章である、この小さな女の子との出会いの部分の原型が、「赤頭巾ちゃん気をつけて」を執筆する三年前にすでに完成していて、逆に、この部分から「赤頭巾ちゃん気をつけて」という作品をふくらませていった、ということを明らかにしているが、この場面

での主人公の心情が、ほとんどそのまま、この作品全体のモチーフを象徴しているということができるであろう。

現代の情報獲得競争の中では、たがいに傷つけ合う不毛で残酷な競争の手段となるか、さもなければ、自己の内に封じこめざるをえない、自分が獲得し、蓄積してきた知識や情報を、逆に、そうした競争社会のまっただ中で、知識や情報がそのまま純粋に肯定的に生かされる物語をつくりあげることに使うこと、別な言い方をすれば、自分の知識や情報のすべてを、そうした物語をつくるために使うことで、肯定的に生かすこと、これが、「赤頭巾ちゃん気をつけて」において、通俗的な虚構のおもしろさと饒舌という方法がとられている、もう一つの、より積極的な理由であるといってよいであろう。現代の情報化社会においても、聞き手をおもしろがらせ、楽しませるために語るという、物語の最も基本的な原理がプラスの価値を持ちうること、べつのいいかたをすれば、情報を発することが受け手の知的欲求を満たし、喜びとなりうることを確認してはじめて、作者は、この作品を書き、情報化社会に参加することができたわけである。

三

最後に、この作品が、どのような歴史のうえに生みだされたのか、という問題にふれたい。この作品の舞台となっているのは、いうまでもなく、現代の情報化社会である。次の引用は、この作品の冒頭の一部分であるが、主人公の置かれている状況をあざやかに表わしている。

例の東大入試が中止になって以来、ぼくのような高校三年生というか旧東大受験生（？）というやつは、「可哀そうだ」という点で一種のナショナル・コンセンサスを獲得したおもむきがある。なにしろ安田トリデで奮戦した反代々木系の闘士たちまで、「受験生諸君にはすまないと思うが」なんていうほどなんだからこれは大変だ。かくしてぼくたちは、まるで赤い羽根の募金箱か救世軍の社会鍋みたいにまわり中から同情を注ぎこまれたうえ、これからどうするの？　京都へ行くの？　といった一身上の問題に始まり、ゲバ学生をどう思うかとか、サンパとミンセーのどっちが好きかとかいったアンケートまでとられて、それこそ、あーあ、やんなっちゃったということになるわけだ。

主人公が直面し、その対処に悩んでいるのは、東大入試の中止でも、その直接の原因である学園紛争でも、さらにその背景にある政治的・思想的対立でもない。主人公が悩んでいるのは、マスコミに象徴される情報化社会の中で、不特定多数の見知らぬ人間にむかって「一身上の問題」を語らせられることであり、一言で答えられるはずのない社会問題についてのコメントを、アンケートのような形で要求され、それに答えなければならないということである。

入試の中止そのものは、この主人公にとって、そうした画一化された情報獲得競争を代表する受験競争からの解放であり、負けおしみではなく、独自に知性を育てていくためのチャンスとしてとらえることのできる事態である。そうした主人公の思いにもかかわらず、「可哀そうだ」という文脈で理解されてしまうところに、あるいは、「サンパとミンセーのどっちが好きか」というように、あらかじめ対立する項目として設定された選択肢を選ばなければならず、必ずしも自分の思いと一致しない答えが、たとえわずかなものであるに

せよ、自分の答えとして社会的影響を構成するようになるところに、主人公の悩みがあるのである。

そして、こうした画一的情報によってものごとを判断する傾向は、体制に反対しているはずの学生運動の闘士たちにも、無自覚なままに浸透してしまっているのであり、入試中止に関して「受験生諸君にはすまないと思うが」などという闘士や、あるいは、別の例をあげれば、廊下で出会いがしらに「きみはベーテーをどう思いますか?」などといきなり質問し、その一問一答によって敵味方を識別し、答えられない人間を敵として否定するような学生についても、主人公は異和感を覚えるのである。

つまり、「赤頭巾ちゃん気をつけて」という作品は、情報化社会の進展にともなって、必要悪としての画一化が社会全体に浸透し、不毛な競争や対立が助長されていくという状況に対し、より長期的なヴィジョンにおいて、先に述べたような、お互いを幸福にするための情報伝達という、最も基本的な原理確認の必要性を訴えているのである。

こうした主張は、昭和三十三年の「喪失」以来の模索によって得られたものであろうが、先に引用したエッセイの中で、作者自身、自分の少年時代にまで、そうした発想の原型をさかのぼっている。

要約されることを避けるように、通俗的な饒舌体で行われている作者の説明を、あえて要約すると、まず、作者は、自分の世代を、「戦時体制」に実質的には組みこまれず、また、「朝鮮戦争後のいわゆる逆コース」にも組みこまれずに、「戦後新教育の理想に最も燃えていた時期」に少年期をすごした、いわば、「戦争体験世代」と「平和体験世代」との「境界」に位置する世代だとする。そうした「境界」の世代として、作者は、いわゆる昭和二十年八月十五日の体制の急変と、それを境にして「戦争体験世代」が「8・15以前の日本」を「総否定」する様子を、また、朝鮮戦争後「行き過ぎ是正」の名のもとに体制が修正され、「平和体験世代」が「肥大した既制秩序としての平和と繁栄に対して激しい批判を投げつける」様子を、そのどちらにもある程度共感しつつ、同時に、「抽象的なよそよそしさ」を感じながら冷静に眺めてもきた、と述べる。そして、その結果、体制というもの、また、それを支えるイデオロギーというものが、本来、フィクショナルで相対的なものであること、それにもかかわらず、あるいは、そうであるからこそかえって、それが現実の場で主張されるときは、それに反するものを「総否定」することによって正当化をはかるという権力的な形をとる、というメカニズムを実感し、そのメカニズムに対する異和感を感じながら自己形成を行ってきた、と作者は言う。

こうして自己形成を行った作者が、日本の「平和と繁栄」にともなう「価値の相対化と情報の洪水が同時進行するという状況の中で」、「平和体験世代の『ハシリ』としての立場をはっきり選び」、「喪失」をはじめとする小説によって社会参加を行うのであるが、それが、実は、「競争関係の中で傷つけ合う『若さ』」を提示するに終わっていることに気づき、沈黙に陥り、その後、学園紛争をきっかけに再び筆をとって、この「赤頭巾ちゃん気をつけて」という作品を発表することになるのである。

小説を書くことが社会に対する行為、それもプラスの価値を持つ行為でなければならないとする作者の姿勢、作品に即して言えば、一人の子供を幸福にするために物語をつくる主人公の姿、こうした

理想的な社会参加のイメージは、作者が自己形成を行った「戦後新教育の理想に最も燃えていた時期」に根をもっているということができるであろう。そうしたイメージにもかかわらず、「喪失」によって現実に社会参加を行ったとき、理想が現実社会の競争の論理にのみこまれ、ネガティブなものへと変質してしまうことをどうしようもなかったのであり、社会的にも、ちょうどその頃、そうした戦後民主主義の理想が疑われ、失われようとしていたわけで、その後の時代の進展によって、さらに理想は見失われ、競争や画一化などの必要悪の論理が社会全体に浸透してしまった、と作者は考えるのである。そして、作者は、その戦後民主主義の理想をもちこたえ、成熟させて、「赤頭巾ちゃん気をつけて」を発表した、といってよいように思われる。

いわば、戦後民主主義の理想とその後の日本の社会的現実との落差が、作者の創作のエネルギーであったわけだが、しかし、作者は、決して、現実の強固さを悲観的に語っているのでもなく、また、抽象的な理想を実体としてそこから現実を否定しようとしているのでもなく、さらに、現実からずれた特殊な作品空間に理想を解放しているのでもない。作者の意図は、もっと実践的なものである。

作者には、すでにその自己形成の時期から、イデオロギーの権力的メカニズムに対する異和感があったわけで、そうした作者にとって、脱イデオロギーにつながる価値の相対化と情報化とは、基本的には、むしろ勧迎すべきものであったと思われる。作者にとって問題なのは、そうした時代の動きにともなって、必要悪が市民権を得て社会全体に浸透する一方で、理想が見失われていくという、価値の相対化と情報化とに対する対処の姿勢なのである。そこで、作者は、社会全体に浸透している競争や画一化といった必要悪の弊害を充分に認識し、その認識の裏打ちの上に、理想の維持を要請しているのである。現実における必要悪の論理があまりに強力で、理想が失われそうになった場合には、そうした認識を一時的に停止し、現実の明るいイメージと戯れてみるといったことをも認めるのであるが、それも、あくまで、現実社会とかかわる主体的理想を維持するための、柔軟な戦略の一つなのである。

「赤頭巾ちゃん気をつけて」の中で、主人公の兄が書いたものとして『馬鹿ばかしさのまっただ中で犬死しないための方法序説』という論文が紹介され、それが、エッセイ「狼なんかこわくない」の副題にもされているのであるが、作者が庄司薫というペンネームを使い、同名の高校生の主人公を描くことによって意図したものは、主体的理想を維持することの困難な時代の中で、それを維持するための理論と実践とを若い世代に伝えようとすることであり、また、作者自身、マスコミやジャーナリズムの圧力を避けつつ、時代状況に対して主体的にかかわることであった、といえるように思われる。そして、この作品が芥川賞を受賞することになって、この作者の意図のうち、マスコミやジャーナリズムを避けるという部分は計算違いに終わり、それがその後の作者の創作活動のさまたげにもなったようであるが、残りの意図は、作者の計算以上に達成されたということが言えそうである。

この小説が発表されてからすでに二十年近くの月日がたっているのであるが、大学入試の状況一つを例にとってみても、その競争の激化と画一化の傾向は衰えていないように思われる。そして、そうした状況の中で、認識を一時的に停止し、明るいイメージと軽薄に

戯れてみるというような生き方がほとんど一般化してしまったようにみえるほど、現実に対する主体的なかかわりは困難になっているようにも思われる。そうした意味で、一見、最も風化しやすい部分を持っているにもかかわらず、この作品は、困難の中で主体性を維持するための実践的書物として、現在においてもアクチュアルなものであり続けているように思われるのである。

――鈴峯女子短期大学講師――